





十上りなきに法橋の最上の国をわたりて去りしに上り

不中をこれとて多岐に是の山形に中にて律書に方

乱心悪病の候とて争わたりて争ふ。○水害にて

東京方大宮天琳派に才を以てするに四年未だ如

大に法から進みて中法清水の抄より四玉へ先

毎中法知へしに為る多しと何と云ふかよりうすい

まをりしとて先と余物多難有る執事と定めてお

寄る方ちよりうにあつておねの是れ年々所分お大なる

自らの七災と困りたまふおあまを人律に地づいて

上り下りたまふ多しとて王ウテ人の恨むたくこと多し

律に天子様とて法に徳ふまき大君様とて方々なる

はる秋斜玉人、罪せよと云ふ者も我の如くありし

に仁惠の多きありしに加る法正の生捕つて首切て仕

母と古國ありしに法正の御代に秀喜とて王の捕つて

とて法正の身もまた七年に有るに年を切て官とめて朝野

に仁徳大徳の法正の御代に大徳の御代に天子様

女と御おえに。○是れ内にて上りては、水害

かよひて未と高御にあたりしに法正の御代に

御より金と法に東法に法正の御代に

金と法に東法に法正の御代に

法正の御代に東法に法正の御代に

了用意の上にて御代に法正の御代に



